慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	字音接尾辞「的」の性格について
Sub Title	
Author	龐, 皓文
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2025
Jtitle	日本語と日本語教育 No.53 (2025. 3) ,p.77- 77
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20250300-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』53：77（2025.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

字音接尾辞「的」の性格について

龐　皓文

キーワード
字音接尾辞、「～的」の用法、「～的」の前接要素、前接要素の拡大による機能の拡張、「～的」の必要性

字音接尾辞「～的」は、その意味領域の広さと同時に、その曖昧さも指摘されてきた。特に、近年現れた新用法の「わたし的」「長さ的」などの表現により、「～的」に接続する語には規則がないようなイメ–ジを持つ人も増えている。中でも、中国人学習者は「～的」を過剰に使用することがよく見られる。この背後には母語の影響以外にも、近年「～的」の使用範囲が拡大されて、多様な語に接続するようになっている用法の広がりがその理由だと考えられ、「～的」の理解が難しくなっていると言えよう。

そのため、本稿では、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）に出現した「～的」の前接語を対象とし、（1）野村雅昭（1974、1978）に基づいて、その結合形式を分類する。次に、（2）国立国語研究書（2003）『分類語彙表―増補改訂版―』に基づいて、前接語を含む字音接辞「～的」の意味用法について分析を行う。これにより、「～的」の前接語の性格を明らかにすることを目的として、「～的」の用法を改めて検討した。

その結果としては、まず（1）野村の分類（A 類：ガを伴って自立する語、B 類：ナ形容詞になり得る語、C 類：スル動詞になり得る語、D 類：単独で文節を構成するもの）を踏まえて、筆者は新しくこれらの性格を同時に持つ AD 類、BD 類と ABC 類を作った。また、筆者は、D 類（絶対（的）に）、AD 類（現在（的）に）、ABC 類（共通（的）に）と結合する際に、必要としないところに「～的」をわざわざ入れることに注目し、BCCWJ で「～的」を入れる用法と元の用法と比べたところ、サ変可能以外の場合はいずれも元の用法がより多く使われていることが分かった。この現象は「～的」の前接要素の拡大による機能の拡張によるものだと推測する。しかし、元の用法の数が多いことは当然であるが、それぞれの類の中では、①用例数が比較的多く、「～的」と結合して違和感がほぼない語と、②用例数が比較的少なく、違和感がまだ残る語、という二つのグループに分けることができると考えられる。他にも、「代表的」のような連体修飾の時に「～的」と結合する傾向が強く、副詞用法の時に動詞の活用形で表す傾向が強いという例もあった。これらは「～的」の前接要素の拡大に伴った結果だと考えられる。この前接要素の拡大による機能の拡張があってから、「～的」に接続する語には規則がないようなイメ–ジを持つ人も増えているのあろう。

また、（2）の意味分布においては先行研究の結果と比べて、顕著な差はないということが分かった。

今後は、BCCWJ 成立以降の日本語資料も観察しながら、「～的」の前接要素の拡大による機能の拡張について調査を行っていく必要があるであろう。